
第百六話

洛中妖怪事付渡部綱斬捕鬼手事

『前太平記』上 卷第十七 三二九頁から三三五頁より

[妖怪洛中に跳梁す]

都には去年の秋の初めから色々な天災があつて、彗星が多く現れたので、また何かの事件が起ころうとするのだろうかど不安を抱かないというものはいない。案の定、今年天延四年の春、様々な妖怪がたくさんいる中に、老い若きを選ばず男女を

老若を撰まず男女を嫌はず、

区別することもなく、人が多くいなくなる事件が起こる。その様子は死んでいても

其様、死しても失せず、

いなくならず、単に満座に連れだつて座っている中に、立っていたとしても見えな

唯一座に列なり居たる中に、

立つと見へず、

いだけでなく、（姿を）出したとしても見ることは出来ず、さっと消えるようにい

出でしても見へず、

掻き消す様に失せにけり。

なくなってしまったのだった。行方も分からず、居所も聞き知らず、ことさらもう二度と帰ってくることもなかったので、誰がどうして連れていくということも知れず、不安に思うこと限り無い。申の刻(午後四時頃)を過ぎたところ、(人々は家

申の剋より下がりぬれば、

に) 人さえも入れず、外に出ることもなく、門を閉じてとどまっているのだった。

人をも入れず、 出づる事もなく、 門戸を閉ぢてぞ居たりける。

最初のころは、洛中商家の男女だけであったが、後には事件は大きくなって何とかという公達などといった方や、公武の間でも貴族三四人もいなくなってしまうわられた。こうしては帝にもお近づき申し上げ、どのようなことを成し申し上げるのだら

斯くては玉体に近付き奉り

うと、不吉に思い怖くないという者はいない。これゆえに比叡山からたくさんの僧をお招きして、清涼殿を会場として、仁王会^(巻)をお修めになる。さらに勇猛果敢な武士にお言いつけになり、禁門を警備させるのが良いと仰って、国々の武士をお呼びになって上洛させる。その人々には、左衛門督兼武蔵国太守源満政、佐渡判官源満季、上総国太守源頼光、淡路国太守源親、上野国太守平維叙、肥後国太守平維将、信濃国太守平維茂、大夫平維モト、阿波国太守小野保衡、相模国太守橘敏貞、河内国太守紀淑行、丹後国太守大江朝枝、下野国太守藤原千時、そのほかにも武に名を示したほどの武士が日本中から上洛してきて、皇居の四門を護衛する。

[宇治橋の鬼女]

このようにしていても洛中はやはり穏やかではなかったもので、もう一度諸卿で評議を行ない、「ともかくも占いにかけて、神の御崇りか、あるいは何かの悪霊亡霊の仕業か、その詳細をお問いただしにせずにはいられないだろう」と仰って、このころの天下第一の博士、播磨国太守安倍晴明をお招きして、御判断いただこうと

勘へ申すべき旨

いう次第をお命じつけになった。この晴明と申し上げる者は、天文暦数のことは陰

仰せ付けらる。

天文暦数の事は、

陽頭賀茂保憲が心の奥底から生み出したような者で、その道に通じた姿は、まるで

陰陽頭賀茂保憲が肺肝の間より出でよ、(貳)

其道に通達せる事、

神通力を以て宿命のように過去未来現在のことを慮ることは、掌を指さすかのよう

恰も宿命通を得て過現来の間を察する事

掌を指す如し。

だ(→容易にやっけてのける)。そこで占い申し上げたことは、「今回の災いの兆し

は必ずしもいい加減な話ではない。山城国宇治里宇治橋の下に一人の鬼がいる。こ

必ずしも小縁の事に非ず。

の者は嵯峨天皇の御代にある公卿の娘であったが、余りにも嫉妬深く生きてながら鬼となって、憎らしく思う女を憑りついて殺そうと貴船神社に願立てして宇治の川瀬に三十七日つきり、とうとうその存在は死んでしまったが、執念の魂は鬼となって憎らしいと思う女、その血縁にある自分を弄ぶ男の親類見境なく(?)残ることなく思うように憑りついて根絶やし、依然として宇治橋の下にとどまり住んでいる。ところが、天慶帝(朱雀天皇か)の家臣の参議右衛門督藤原忠文は、東西の野蛮人の追討使として攻め向かった時に二度も手柄がなかったため、忠賞も執り行う

[東夷西戎\(参\)](#)の追討使として

ことが出来ず、その恨みを持って立腹したまま死んで、様々な怪異を示す。このた

瞋恚の中に死して、 様々の怪異を現す。

めその霊を鎮めて宇治の離宮と祝ってから、ようやくその怒りは静まった。けれど

稍其忿り鎮まりぬ。

もその霊はその鬼女と夫婦の契りをしている。さらに天慶の時の恨みに仕返ししよ

彼鬼女と夫婦の契りを成す。

うと鬼女によってらくちゅうを行脚させて、今この妖怪になっている。過ぎ去った

弘仁の時代、摂州西生郡(肆)に長柄橋(伍)をかけて、側に橋姫宮移す。山崎浜名の

橋も同じようにするのである。もし、今この災いを鎮めようとするならば、宇治

橋(陸)の下に祠を建てて橋姫宮と祝ったならば、悪霊はすぐに納得して、洛中は安

心して支障なくございましょう」と申し上げた。あまりに大げさであったが、今ま

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL(月下庵/https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite)をご記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※

余りに事嚴重なりしか共、

で清明が申し上げたことが一つとして間違えていることはなかったのので、すぐに申

今まで清明が申す処、

一つとして相違したる事なかりければ、

された内容に従われるべきだと、その構築をと申し上げた。

即ち申す旨に任せらるべしとて、

其経営とぞ聞こえし。

[綱、鬼女の腕を切り取る]

こちらで禁門を警備する武士の中の一人である源頼光朝臣は任国が遙か遠くにあ

任国遼遠たるに依つて

ることによって、上洛に数日かけて、やっと四月九日に京に到着し、すぐさまその

道中数日を経て、

夜から宮城の陽明門を警護にあたられる。そのいでたちは、衣冠の下に萌黄匂の着
背長(漆)と、膝丸という二尺七寸あった受け継がれる太刀を身につけ、魔を破り大変

な天下をもたらすための蛇形弓(捌)の真ん中を握って、切生の征矢(玖)を高く背負

い、皇居を守ってございました。共についてきた家来には綱・公時・貞光・季武、

思い思いに武具を備えて、あらゆる方向に目を行き渡らせて、化け物が来るかと待

万方に眼を賦つて

化生や来ると待ち懸けたる。

ち構えている。その様子はキラキラと光って、付近を一掃しているように見えた。

其勢ひ燦然として、

辺りを払ふて見へにけり。

さて、頼光がまだ冷泉の判官代であった頃、中納言維仲卿の御息女が世に二人とい

世に類無く

ないような美人でいらっしゃったのだが、どのようにして垣間見して、お見初めな

坐せしを、

さったのだろうか、夢心地に思い焦がれて、今は、貴女への思いを言いもしない

現なき思ひ焦がれ、

今は

で、

信濃にある木曾路の橋のように思いをかけることが出来るのだろうかと申し上げた

中々に云ひも放たで信濃なる、木曾路の橋の、掛けたるやなぞ

頃より、素晴らしい仲とおなりになったのだが、まもなく上総国太守として、上総

わりなき仲と成り給ひしに、

程無く上総守にて彼処に下り給ひぬ。

におくだりになった。時がたって昨日の暮れくらいに都にお帰りになったが、すぐ

に皇居のために泊まって警備を申し上げなされたので、まだ姫君にも恋文を送る暇

早禁庭に宿直申し坐しければ、

未だ其ぞとも云ひ送る暇もなくて、

もなく、たいそう辛くて気がかりだった。家来の中でも綱は幼いころから遠慮す

最意苦しく覚束無かりけり。

ることなくお召し使わせになっていたのも、こっそり渡部の耳にしかじかと申し含
めて、一条大宮にある所（姫君の所在）に派遣なされた。夜になって、普通と違っ

夜陰に及び、殊に

て洛中は慌ただしい時間であるからとあって、受け継がれる霊剣鬚切を身につけ

洛中忽々の時節なればとて、

相伝の霊剣鬚切をぞ帯かせらる。

る。綱もお忍びの使いであるので、わざわざお供を付けずに親しい口引きの男二人
を伴って、その場（一条大宮）に行って、念入りにご伝言申し上げ、（恋文を）お
引き受け申し上げ帰ったのだった。一条堀川の戻橋を渡った時、東の端に、二十歳

東の詰に、齡廿計り

ほどに見える女が雪のような白い肌が月に照らされて、良い香りが辺りに充ち、非

と見へたる女の、

雪の膚は月に輝きて、

馨香岐に満ち、

常にその姿が優雅である者が、紅梅の桂にお守りをかけて、腰の袖に経を持ち、人

誠に姿貴なるが、

紅梅の桂に守懸けて、

佩帯の袖に経を持ち、

も連れずたった一人で、南に向かって歩いていった。綱が橋の西の端を通過したとこ

人をも具せず只独り、

南へ向かひてぞ行きける。

綱は橋の西の詰を過ぎけるを、

ろで、（女は）近づき寄ってきて、「もし、何処へいらっしゃる人でしょうか。わたくしめは五条辺りでございます。非常に夜が深くて恐ろしく思いますので、送ってくださりませんか」となれなれしく申し上げたので、綱が心に思ったことは、

送りて賜ふなんや」

「今、都は怪異があるといつて、身分が高い者も低い者も、夜になると外出がなく

「当時洛中怪異ありとて、 上下の輩、 夜陰には往来絶へたるに、

なるのに、それでいて女の身であつて、夜更けになつてたった一人で行くことは、

而も女の身として、 深更に及びて唯独り行くは、

いかにもな癖者であるようだな。私は逃がすまいぞ」と思つて、急いで馬から飛び

何様癖者ござめれ。 己遁さじ者を」

降りて、「容易なことである。この馬にお乗りください」と言つたところ「嬉しく

「易き間の御事なり。此馬に召され候へ」 「悦ばしくこそ」

存じます」と言うので、綱は近くに歩み寄つて、女を抱き上げて馬にさつと乗せて

て、堀川の東の端から南の方に行つたところで、正親町^(拾)へもう一二段ほどの時

に、この女が後ろを振り向いて申し上げたことは、「本当は五条辺りにさほどの用

「誠には五条亙りにさしたる用も候はず。

事はございません。私の住む所は都の外でございます。そこまで送ってくださりま

せんか」と申し上げたので、「お引き受け申し上げました。どこでもいらっしゃる

「承り候ぬ。

何処までも御座します

ところに送って差し上げましょう」と言ったのを聞いて、(女は) すぐさまおごそ

所へ送り進らせ候べし」

頓て

かだった姿を変えて、恐ろしい鬼となって、「さあ、私の行く所は愛宕山だ」と言

厳しかりし姿を替へて、 恐ろしげなる鬼と成つて、 「倡、我が行く所は愛宕山ぞ」と云ふ儘に、

うと、そのまま綱の髻を掴んで引っ提げ北西の方角に飛んでいった。綱は少も慌て

綱が髻を掴んで提げ、 乾の方へぞ飛び行きける。

しず、例の鬚切をすっと抜き、上向きに鬼の手をすぱっと斬る。綱は北野天満宮

空様に鬼の手をふつと斬る。

(拾巻)の回廊の屋根の上にドンと落ちる。鬼は手を切られたままで、愛宕山へ光の如

愛宕山へぞ光り行く。

く去って行った。

[鬼女腕を奪い返す]

こうして綱は回廊から跳ね降りて、髻についている鬼の手を取って見てみたところ、雪のような顔色とは打って変わって色が黒いこと限り無い。白い毛が隙間なく

雪の貌は引き替へて黒き事限りなし。

白毛間無く生ひ繁り、

生い茂り、銀の針が立っているかのようである。これを持って帰って（頼光の御前

銀の針を立てたるが如くなり。

に) 参上したところ、頼光は非常に驚きなさって、思いがけないことであるのでと、安倍晴明を招きよせて、「どのようなことであろうか」とお聞きになったところ

「如何有るべし」

ろ、「これが洛中を騒がせた宇治橋の鬼女である。霊剣の備えと、渡部が勇敢で

霊剣の武備、 渡部が勇敢を以て

あったために打ち取ったこと、非常に稀有な例である。しかしながら、綱には七日

撃ち捕るりし事、 誠に希代の様なり。

の暇をお与えになって、物忌みをされた方がいい。鬼の手は念入りに封じ込めなさ

鬼が手は、能く能く封じ置き給ふべし。

るべきだ。祈祷には仁王経を説かれるのがよいだろう」と申されたので、そういわ

祈祷には仁王経を講読せらるべし」

れた通りに執り行いなさった。いよいよ六日と申し上げた黄昏時に、綱の住まいの

戸が叩かれる。何処からの者だと尋ねるところ、綱の養母で、摂津国渡部にいた者

が上洛してきたと答えた。その養母と申し上げる者は、綱にとっては伯母である。

(そのため) 人を使って答えるならば、不快にお思いになることもあるだろうか

人して云はゞ

悪し様に意得給ふ事もやとて、

思って、綱は門の傍まで出てきて、中から申し上げたことは、「めったにないご上

「適々の御上りにて候へば、

洛ですので、すぐにお会い申し上げたいと思いますが、差支えある事情で七日の物

早速見参に入り進ませたくは候へ共、

子細有る事にて、七日の齋にて候。

忌みをしてございます。今日で六日目になった。明日だけは、どのようなことがあ

明日計りは、

何なる事候とも

りますとも、(お会いすることは)叶えることは出来ない。宿をとってください。明

叶ふまじ。

後日になったならば、入れて差し上げてお話申し上げます」と申し上げたところ

御物語をも仕り候べし」

ろ、母は聞き入れず、さめざめと涙を流して、「どうしようもない状況である。し

母聞きも敢へず、

「力及ばぬ事共なり。

かしながら、貴方を(貴方の)母が産み落とすと時から、(貴方を)引き取って養

さりながら、

和殿を母が産み落とせしより、

請け取りて養ひ育てし志、

い育てた思いは、どれほどだと思っているのだろうか。夜といっても安らかに寝る

何計りとか思ふらん。

夜とても安く寝ねもせず、

こともせず、湿った所（寝にくい所）に私は寝て、乾いている所（寝やすい所）に

濡れたる所に我は臥し、

乾ける所に

貴方を寝かせ、四歳五歳になるまで、強い風にも当てまいとして、いつのまにか我

和殿を置き、 四つや五つに成るまでは、 荒き風にも当てじとして、 早晚我が子の成長して、

が子が成長して、人にも勝って素晴らしい姿を、見たい（話を）聞きたいと思ひ続

人に勝れて吉からん事を、

見ばや聞かばやと思ひつゝ、

けて、夜も昼も願った甲斐があつて、上総国太守の家臣に渡部源次あると噂された

夜昼願ひし甲斐ありて、

上総守殿の御内には、渡部源次と云ひつれば、

ところ、肩を並べる者もない。上にも下にも称えられたので、喜びとばかり感じ

肩を双ぶる者もなし。

上にも下にも誉められぬれば、 悦びとのみこそ思ひつれ。

ていた。都へは遠く長い道のりであるので、普段は上することもない。（その姿を）

都鄙遼遠の路なれば、

常に上る事もなし。

見たい（貴方に）会いたいと恋しく思う心こそ親子の切実な願いである。このごろ

見ばや見へばやと、恋しく思ふ心こそ

親子の中の歎きなれ。

此程は

はずっと夢見が悪くございましたので、不安に思われて、渡部から来たけれども、

打ち続き、夢見も悪しく侍れば、

覚束無く思はれて、

渡部より上りたれ共、

門の中にも入ることが出来ず、親とも思ってもらえない私の、子への恋しさこそ何

門の内へも入れられず、

親とも思はれぬ我身の、

子と恋しきこそ墓なけれ」。

もならない者だ」。綱は道理を責められて、仕方なく門を開けて入れてしまったのだった。母は非常に喜んで、昔のことや将来のことを話して、「ところで、七日の物忌みと言っていたことは、どのようなことであったのだ」と聞いたところ、隠すべきことではないので事実のままに話した。母はこれを聞いて、「それでは重要な

「さては重き

物忌みであったのだなあ。それほどのこととも知らないで恨み言を言ったなんて残

慎みにて在りけるぞや。

念だ。しかしながら、親は守りであるようなので、非常事態もまさかあるまい。そ

さりながら、

親は守りにて有るなれば、

別の事はよも非じ。

もそも鬼の手というものはあどのようなものであろうか。見てみたい」と申し上げられた。綱は聞いて、「容易いことでありますけれども、嚴重に抑え込んであるので、七日過ぎなくては叶えることは出来ません。明日の暮れでしたら、（また）お

明日暮れて候はゞ

目にかかってください」。母が言うことには「もうよろしい。それならば見なくて

見参に入れ候べし」。

「よしよし

さては見ずとても、

も何かが損なわれることではない。私はまたこの暁に、夜通しかけて下向しよう」

事の関くべき事ならず。

我は又暁は、

夜を籠めて下るべし」

と恨んでいるように見えたので、封じていた鬼の手をやむを得ず取り出し、養母の前においてしまった。母は何度もこれを見て、「ああ、恐ろしいものだ。鬼の手というものはこのようなものであったのだなあ。今に始まったことではないけれど、

今に始めぬ事ながら、

お前の武勇が人より優れていなかったら、このような恐ろしいものを容易に打ち取

和殿が武勇人に勝れずば、

斯かる怖ろしき物を、

容易く撃ち捕る事を

ることができるだろうか、いやできないはずだ」と言って置くようにすると、立ち

得てんや」

と云ひて指し置く様にて、立ちざまに、

際に、「これは私の手なのでもらってていくぞ」と云うままに、その背丈は一寸ほ

「是は吾が手なれば取るぞよ」

どの鬼となって、空に上って破風の下を蹴破って、空に輝いて消えていった。それ

空に上って破風の下を蹴破って、

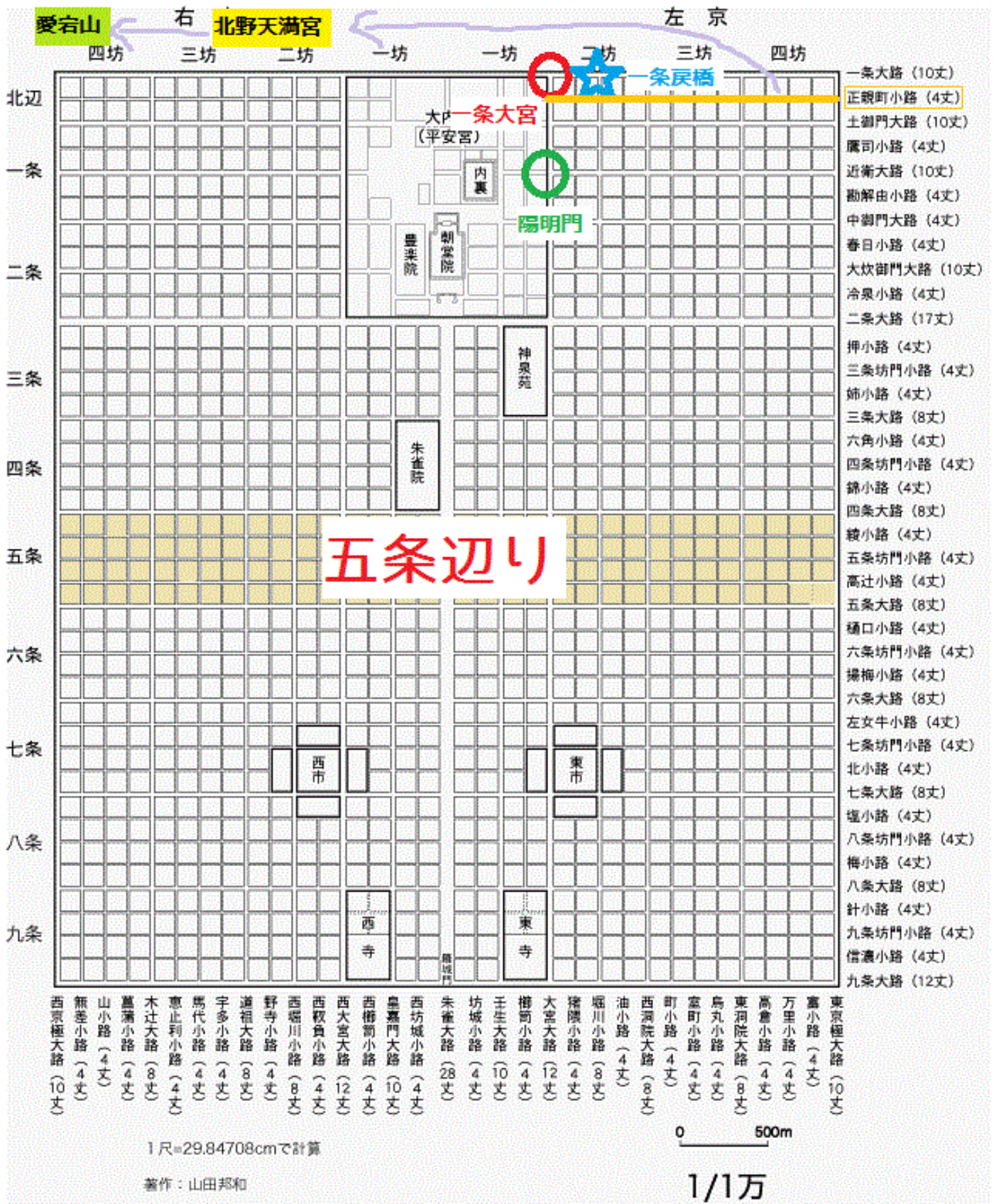
虚空に光りて失せにけり。

から、渡部家の屋敷のつくりは、破風を置かず東屋づくりにするとかいう。綱は鬼に手を取り返されて、七日の物忌みを破ったといっても、仁王経の力によってその身には何の差支えもなかった。そうして初めて、鬚切は鬼の手を切った後、鬼丸と改名することになった。

注釈

- ※壺・仁王会……国家の平安を祈って、宮中の大極殿・紫宸殿・清涼殿などで、仁王護国般若経を講じた行事。陰暦の三月や七月の吉日に行われたが、臨時に行うこともあった。この時はおそらく三月に行っている。
- ※貳・陰陽頭賀茂保憲が肺肝の間より出で、……太平記(3)「楠は～、陳平・張良が肺肝の間より流出せる兵なれば」(まるで陳平・張良の心の奥底から生まれたような武士なので)
- ※参・東夷西戎……「東夷」は中国の異民族や、日本の蝦夷のことを指し、「西戎」は中国での西方の異民族のことを言う。作中では、関東と関西の方と解釈。将門と純友のことか
- ※肆・西生郡……現大阪府大阪市の一区。
- ※伍・長柄橋……現大阪市北区本庄東と大阪市東淀川区柴島とを結ぶ 全長 656.4m、幅員 20m の橋。現在かかっているものは昭和 58 年にかけてられたものだが、嵯峨天皇の御代である弘仁 3 年にも同名の橋がかけていたようであるが、その 40 年後には廃絶している。
- ※陸・宇治橋……現京都府宇治市にかかる。
- ※漆・萌黄匂の着背長……「萌黄匂」は鎧の緞の一種。「着背長」は大將着用の鎧の大形なことによる美称。
- ※捌・蛇形弓……不詳。
- ※玖・切生の征矢……矢羽根の鷲の羽が、白羽に数条の黒褐色の斑文がある矢。
- ※拾・正親町……現京都府京都市上京区。
- ※拾壺・北野天満宮……京都市上京区馬喰町にある元官幣社。祭神は菅原道真。

< 綱動向メモ >



※こちらの図は「平安京探偵団 (<http://homepage-nifty.com/heiankyo/>)」様より拝借し、加工いたしました。
(2021/2 修正)

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL (月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>) をご記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※

有名な一条戻橋伝説ですね。この伝説に登場する鬼女ですが、作中では橋姫となっていますが、酒呑童子の配下である茨木童子であるとする話もあります。こちらに関しては、酒呑童子退治の際に、藤元元より言及されておりますので、その際にまた今回と次回を比較してお楽しみください。

余談と言うか、自分語りと言うかのお話ですが、今回の鬼の腕切りの話は、ある意味私にとって、初めて訳をした80話「頼光誕生事」以上にとても大切に思い出深い話です。高校の恩師であるF先生に初めて面倒を見てもらったのがこの話でした。その時、先生から大切なことを教えてもらい、この物語を訳をしながら、初めて「楽しい」と心から思った話もこの話です。

注釈にも記した「陰陽頭賀茂保憲が肺肝の間より出で、」の部分です。当時、私はどうしてもこの「肺肝の間より出づ」の部分の訳が分からなくて、学校のお昼休みにF先生にどういう意味かを聞きました。しかし、先生でも訳が分からず、『日本国語大辞典』を見てみるといいと教えていただき（当時はまだ『全訳古語辞典』と『広辞苑』しか使っていませんでした）、『日本国語大辞典』を先生と一緒に確認しました。そして、調べてみると、同じような慣用句はなかったのですが、『太平記』三巻に、似た用例があるのが確認できました。すぐに学校にあった全訳されている『太平記』を見ました。しかし、なかなかその文言も見つからず、苦労したのをよく覚えています。

放課後になってもう一度探し、ようやくその言葉を見つけて、意味が分かったことをF先生に報告したところ、先生はそのことを喜んで、なるほどと仰って笑ってくれました。その時、私の顔を見て、F先生が言ってくくださった言葉は、私は決して忘れません。「海熊さん、これが研究だよ」、と。

それまで、私は高価なものを買ってしまったからしょうがなくという気持ちで訳をしていた部分は、正直なところ大きくあって、この取組を研究や、そればかりか趣味とさえもあまり考えていませんでした。しかし、分からない部分を訳すために行う調査の楽しさと、古語を綺麗に訳すことが出来る達成感、そして、F先生の言葉。そんな感動と共に、私は初めてこの取組を「楽しい」と思いました。

今でも、私は訳をするとき、先生のその言葉を思い出します。辞書は古語辞典だけでなく、漢字辞典も見ることができるようになりました。似た用例を見つければ、すぐにその作品に目を通す習慣がつかしました。訳をする前に品詞分解をするといいと言ってくくださったのも先生で、結果、品詞分解の作業で、頭の中になんとなくの訳を作ることが出来るようになり、今まで一話訳するのに（私がチンタラやっていたのもありますが）一か月以上はかけていたのに、一週間と短くなり、今では時間さえあれば一日で訳せるようになりました。

だから、F先生には心から感謝しております。古文が得意科目になり、『前太平記』という作品を好きになれたのも、先生のおかげだと思っています。先生が私のサイトをご覧になっているの分かりませんが、見てく

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL（月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>）をご記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※

ださっている方々もこんなこと寒いかもしれませんし、重たいかもしれませんが、この場で言わせてください。F先生、私は先生のことを、人生で一番の恩師だと思っています。私が分からない箇所を相談すると、一緒に悩んでくれて、色々なことを教えてくれた先生を、私は本当に尊敬しております。

ただでさえ長い回なのに、無駄話すらも長くて申し訳ありません。私にとってとても大切な回ですので、注釈にもいつもより気合が入ってしまいました（いつもこのぐらい注釈書いた方がいいですよ。すみません）。

サイトを開設して早くも二か月。今後も丁寧に訳をしていくつもりですので、御付き合いどうぞよろしくお願ひします。感想・指摘・叱咤激励、随時受け付けております。Twitter やメール等でご連絡ください m(__)m

公開：2015/5/23

改訂：2021/3

海熊童子